

# 寺内正毅・寿一関係資料特集にあたって

長佐古 美奈子

学習院大学史料館は、平成二五年（二〇一三）六月一〇日に寺内多恵子<sup>〔1〕</sup>氏より、寺内正毅・寿一関係資料六五件（総点数四四七点）の寄贈を受けた。数年前に、寺内多恵子氏より資料寄贈の申し出があり、平成二五年度に正式に資料を受贈した。受贈資料の概要は、寺内家に伝来した墨蹟等と正毅・寿一、毅雄父子関係の書簡等史料、写真、皇室よりの下賜品とボンボンニール、その他工芸品、画帖などである。どれも新出、未公開資料である。寺内正毅・寿一の経歴については、紀要二〇号「寺内正毅・寿一新収資料について―皇室下賜工芸品の来歴調査―」に記したが、読者の便を考慮し、一部再掲する。



寺内正毅

寺内正毅は、嘉永五年（一八五二）閏二月五日、長州藩士宇多田正輔三男として宮野村（現山口市）に生まれ、のち寺内家の養嗣子となった。慶応元年（一八六五）長州藩御楯隊に入り、戊辰戦争では箱館戦争に従軍。明治四年（一八七二）陸軍少尉に任官する。明治一〇年（一八七七）西南戦争田原坂の戦で右腕に銃創を受け、右手の自由を失った。

明治一五年（一八八二）閑院宮載仁親王の留学に際し、公使館付武官と

してフランスに随行し、士官養成法などを学ぶ。同一九年一月に帰国し、陸軍大臣官房副長、陸相秘書官から陸軍士官学校長となり士官教育改革を行う。

日清戦争では運輸通信長官として兵站部門を担当して功績を上げた。明治二九年には再び欧州へ差遣。三二年教育總監、陸軍中将になった後、三三年参謀本部次長、陸大校長事務取扱。三五年第一次桂内閣に陸軍大臣として入閣し、日露戦争では陸軍大臣として予算確保など内政面で尽力し、戦争計画を推進した。

明治三九年（一九〇六）陸軍大将に昇進、勲功により子爵となる。この間、第一次西園寺内閣・第二次桂内閣の陸軍大臣を歴任。同四年五月には韓国統監を兼任して、韓国併合を推進。その功により四四年四月伯爵に陞爵。同年一〇月には初代朝鮮総督に就任した。大正五年（一九一六）六月には元帥府に列せられる。

大正五年（一九一六）一〇月第一八代内閣総理大臣に就任し、海軍大臣以外は全員山県系という藩閥・官僚の超然内閣を組織した。寺内内閣は積極的に中国への介入を行う。西原借款を行い、北京政府を支援すると、欧米もこれに追従した。これを受けて北京政府が連合国として第一次世界大戦に参戦したことは、後の反日運動の一因となった。また、国内では金本位制の停止を始め、戦時を理由とし軍備拡張などを推進した。

大正六年（一九一七）、ロシア革命が発生。当初寺内はウラジオストックに艦船を派遣して居留民保護をする方針であったが、アメリカの誘いと外務大臣本野一郎の勧めにより、同七年八月シベリア出兵に踏み切ることになった。翌年一月頃から、シベリア出兵の噂により米価が高騰し、各地で米騒動が発生した。この米騒動の責任をとって同年九月二九日内閣は総

辞職した。翌大正八年二月三日大磯の別荘にて六八歳で死去。



寺内寿一

寺内寿一は、正毅の長男。明治二二年（一八七九）八月八日生まれ。陸軍士官学校第一期生（歩兵科）。同四二年陸軍大学校卒業。近衛師団参謀。同四四年少佐・参謀本部員。オーストリア大使館付武官補佐官。大正二年（一九一三）ドイツ駐在（軍事研究）帰朝の後、参謀本部部員。同五年中佐。歩兵第二連隊付。同八年大佐・近衛歩兵第三連隊長。同一年近衛師団参謀長と、軍人としてエリートコースを歩み、同一三年陸軍少将となる。大正八年には、父正毅の死去に伴い伯爵を襲爵。

大正一五年（一九二六）第一師団司令官。昭和二年（一九二七）朝鮮軍参謀長。同四年中将・独立守備隊（在南満州）司令官。同五年第五師団長、同七年第四師団長、同九年台湾軍司令官を経て、同一〇年一〇月陸軍大将となり、翌年広田弘毅内閣の陸軍大臣となる。

昭和一二年（一九三七）一月、衆議院での立憲政友会浜田国松議員の演説に対する寿一の答弁が政治問題化、いわゆる腹切り問答となり広田内閣は総辞職した。その後、同年教育総監となったが、盧溝橋事件が勃発したため、北支那方面軍司令官となった。同一三年一月から軍事参議官。同一四年にはドイツ・イタリアへ出張。

昭和一六年（一九四一）一月、南方軍総司令官となり、太平洋戦争では、南方軍を統率して進攻作戦を行い、東南アジアの諸要域を占領。ついで防衛作戦に転換し、占領地の治安確保、軍政の実施、重要国防資源の内

地還送などの作戦準備中にフィリピン・ビルマ方面から連合軍の反撃を受けた。

昭和一八年（一九四三）六月元帥府に列せられ、父子二代の元帥となる。連合軍に降伏後、昭和二年六月二日午前二時四二分<sup>②</sup>レンガム（現マレーシア）にて病死。六八歳。

寺内毅雄は、正毅の二男。明治二五年（一八九二）六月三〇日生まれ。陸軍士官学校第二六期生。大正三年（一九一四）少尉任官、近衛歩兵連隊付。同七年中尉、同一三年大尉となる。昭和四年八月一八日病死。同日綾子夫人も自殺した。

寺内正毅・寿一資料として現在までに収蔵状況が周知されているものは、以下の通りである。

- ・ 山口県立大学図書館<sup>③</sup> 正毅が収集した漢籍など
  - ・ 国立国会図書館憲政資料室 正毅書簡・書類、寿一書簡・書類
  - ・ 自衛隊山口駐屯地尚武館 正毅・寿一の軍関係遺品
- これらは、いずれも従前、寺内家より寄贈されたものである。

山口県立大学図書館資料は寺内正毅の収集にかかる漢籍を、正毅出身地である山口県宮野に寿一が建設した「桜圃寺内文庫」を引き継いだものである。寺内多恵子氏より当館に資料寄贈の申し出があったほぼ同時期に、山口県立大学伊藤幸司氏（現九州大学大学院比較社会文化研究院）も同家の資料調査を行い、文書類約九五〇点が平成二五年度に新たに山口県立大学図書館に寄贈された。この資料群についての目録は平成二七年春に公開の予定と聞き及んでいる。

国会図書館憲政資料室所蔵寺内正毅資料は、日清戦争から第一次世界大戦終了期に至るもので、書簡二千二百通余、書類および日記からなる。書簡には山県有朋差出一一九通、桂太郎差出三七通、田中義一差出七六通、など陸軍首脳書簡および後藤新平差出のものなどを含む。書類は、二個師団増設問題・西原借款・シベリア出兵関係のほか首相時代の外交政策に関するものなど重要な文書が収められている<sup>④</sup>。同室寺内寿一関係文書は

三四六点 大部分は寺内寿一宛の書簡である。発信者は陸軍関係者からのものが多い。

当館では資料受贈後に「寺内資料研究会」を発足し（メンバー…千葉功・岩壁義光・小松大秀・鎌田純子・長佐古美奈子・吉廣さやか・長谷川怜・西山直志）、目録を作成すると共に、内容の調査研究を行った。その成果を今年度「桜圃名宝」展において展示発表し、『ミュージアムレター第二六号』、図録『桜圃名宝（漆芸編）』を刊行した。

しかし、「桜圃名宝」展では、展示スペースの関係から代表的な資料の紹介にとどまざるを得ず、特に寺内正毅・寿一の書簡などの史料についてはほとんど公開出来なかった。このことと山口県立大学に新規に収蔵された資料群目録が近々公開されることから、研究会の成果として本紀要上において「寺内正毅・寿一関係資料目録」を利用者の便を図るために取り急ぎ公開することとした。従って、かなり粗い目録であることを寛恕いただきたい。詳細目録、内容の調査研究については、今後の課題である。

寺内資料研究会では、目録を作成するとともに、メンバー各自がそれぞれの分野から、寺内資料研究にあたった。

小松大秀客員研究員は、昨年度に引き続き寺内家蔵であった漆芸品三件を取り上げ、文様、技法、さらに制作の背景を詳らかにする研究を進めた。漆芸品三件は皇室より寺内正毅に下賜されたものであるが、いずれの作品も明治大正期の漆芸デザイン、漆芸技術のピークが示されたものであることを論証している。

吉廣さやか学芸員は、寺内正毅に贈られた朝鮮螺鈿漆芸品二品の歴史的調査を行った。さらに当館収蔵の旧制学習院歴史地理標本室資料中の螺鈿漆芸品が、この寺内家螺鈿漆芸品と関連する資料であったことを見出した労作である。寺内正毅の朝鮮工芸産業奨励政策が、学習院の歴史地理教育と結びついたのである。

千葉功研究員は、明治四三年（一九一〇）韓国併合の際に山県有朋から寺内正毅にあてた書簡についての紹介と研究をした。近代政治外交史研究

の中では従来、韓国併合の際に山県有朋から寺内正毅にあてた書簡はないとされてきたことに千葉研究員は疑問を抱いていたが、今回その書簡が寺内家受贈資料より新たに発見され、日韓関係史の新たな側面が明らかにされた。

岩壁義光客員研究員は、昭和一六年（一九四一）寺内寿一が南方軍總司令官に任じられた際の作戦準備「奏上書」とその関連史料についての調査研究をまとめた。新発見「奏上書」とその作成過程及び案文の作成者を明らかにするとともに、平成二六年秋に公開されたばかりの「昭和天皇実録」を用いた、まさに最新の研究成果である。

鎌田純子助教は、北沢楽天筆による「黄河大茶会」画帖の紹介をした。近年寺内正毅・寿一父子が文化的活動を積極的に行ってきたことが、伊藤幸司氏らの研究から、明らかにされてきている<sup>55</sup>。本資料は、昭和一三年（一九三八）当時北支那方面軍司令官として北京に滞在中の寿一が、黄河の水と玉泉山の水を茶人仲間である下郷伝平に空輸し、下郷が加藤寛治、本庄繁、武者小路公共などと茶会を開催した様子を北沢楽天が描いたものである。寿一の風流人というべき側面が明らかにされる。

なお、この特集には入っていないが、拙稿「ボンボニエールを読み解くー歴史資料としての視点からー」（七三ページ）において、寺内家より寄贈されたボンボニエールについての調査研究を載せている。あわせてご覧いただきたい。

いずれの論考、資料紹介も寺内正毅・寿一の新たな側面を浮き彫りにしている。

寺内家より寄贈された新出資料を、異なる分野の視点からの調査研究をおこなうために結成された「寺内資料研究会」としては、目論見通り総合的・多角的な調査研究の成果が報告できたと考える。この成果が様々な分野の研究の一助になれば幸いである。

註

- (1) 寺内多恵子氏は寿一妻順子氏の継嗣である。
- (2) 資料番号三五―一―八「南方軍総司令官寺内元帥の死 南方軍総参謀長沼田多稼蔵記」より。
- (3) 山口県立大学より韓国慶南大学校へ寄贈された資料もある。
- (4) 『寺内正毅関係文書目録(付)岡市之助関係文書目録』憲政資料目録八(国立国会図書館 一九七一)
- (5) 伊藤幸司編『寺内正毅ゆかりの図書館 桜圃寺内文庫の研究―文書解題・資料目録・朝鮮古文書解題―』(勉誠出版 二〇一三)